にっぽん民家紀行

キッチン・バス工業会会報 No.38（平成７年１月）～ No.45（平成８年 10 月）より加筆修正

今と昔の台所と浴室考

岡田憲治（住宅ジャーナリスト）

1948 年生まれ。東海大学文学部卒。『野次馬住宅時評』を発行するとともに、住まいの勉強会「野次馬住宅サロン」を開催。NPO 法人埼玉住まいの情報ネットワーク代表。著書に『知ってトクする住宅品確法の本』『住宅のお値段・原価の秘密』『住まいたちの半世紀』など。

釜屋づくりは台所革命だった

キッチンを母屋にドッキング

キッチンを独立させるか、それともダイニングやリビングとつながりをもたせるか、と悩みながら、かつ楽しみながら間取りを考える人も多いようで、記号で記せば LD・K にするか、L・DK にするかと、はたまた L・D・K と、中黒ひとつで変化する空間と苦闘するのである。

こうした悩みは昔もあった。かつてキッチンは釜屋といったが、大きな農家などではその釜屋を母屋と別に建てていた。いわば完全独立型キッチンということになるが、それは火の出所は離しておきたいという配慮である。

だが、キッチンが離れているというのはつらい。廊下で母屋とつなぐとしても、一度外へ出なければならず冬など寒い、また離れていれば料理を運ぶ負担も増える。キッチンまでは重くて遠い道程なのである。いまの主婦ならば「もう、イヤ」といいかねず、だからこそカウンター越しに、サッと料理を手渡せるキッチンが好まれる。

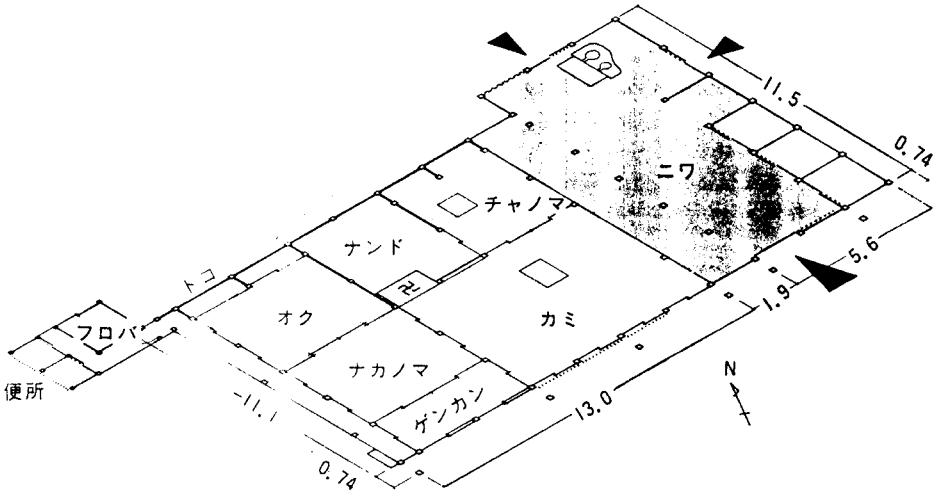
こうした不便さを解消するものとして、昔の建築人が考えだした建て方がある。九州や愛知県、関東では千葉県などで見られた民家であるが、キッチン部分にあたる釜屋を母屋とドッキングさせたのである。これを釜屋づくりとか別棟づくりと呼ぶ。地域によっては釜屋のカマに竈の字を当てることもある。

釜屋づくりの建て方は母屋と釜屋を T 字型に接合させたりするものである。接合させることによって、リビングやダイニングとキッチンが一つの空間となり、短い動線で合理的な間取りが実現したのである。

離れていた釜屋を動かして母屋に接近させるというのは、どなたが考えだしたのかは知らぬが、これはすごい、まさに台所革命で

釜屋づくりの望月家。右が釜屋

釜屋と母屋との境にある樋



作田家の間取り

ある。2DK を編み出した西山夘三のような人が昔もいたようだが、主婦的感覚をもっていた設計者なのかもしれない。

その釜屋づくりの一つが愛知県新城市にある望月家。18 世紀中ごろに建てられたもので、母屋、釜屋とも寄棟で、2 つの建物の軒と軒の間は雨が漏らぬよう丸太を抉(えぐ)った樋が通っている。母屋が桁行 4 間半、梁間 5 間、釜屋は桁行 5 間、梁間 3 間なので外目にはほぼ同じ大きさ、堂々たるキッチンなのである。

LDK 一体の広間

釜屋づくりは LDK 設計のルーツともいえるもので、望月家を覗いても庭とよばれる土間の隅にかまどがあり、その隣には流しが母屋と釜屋の軒の間に配置されている。そしてダイニングとリビングが母屋側にある。しかし、それぞれの空間は障子で仕切られているので、L・D・K と中黒のある間取りとなる。

これが同じ釜屋づくりでも九十九里の網元の家であった作田家(川崎民家園に移築)はもっと開放的な空間である。ひんやりとした冷気が漂う 17 世紀後半に建てられた古民家に足を踏み入れると、24 畳ほどの板の間と、茶の間、そして広い広い土間があり、ぽつんと壁際にかまどが置かれてある。各空間は障子で仕切ることもなく、LDK 一体のオープン型なのである。まさに広間のある風景なのである。

作田家の広い土間にあるかまど

これぞ現代の主婦が求めている間取りであろうか。幼児をリビングで遊ばせていても目が届くし、作業動線も短く合理的である。リビングとダイニングはひとつのスペースなので広く使える利点もある。

またキッチンである土間は炊事、農作業、貯蔵といろいろな機能をもった空間となる。現代用語でいえば、多目的スペースと家事室、

収納スペースが確保されているということになる。さらにもうひとつ、馬屋という車庫スペースも組み込まれている。

戦後、揺れ動いたLDK。その新たなる形態を求めてLD・Kにしようか、L・DKにしようかと悩み、住宅展示場に行っていくつものモデルハウスで研究するのもよいが、一度、古民家を訪ねて昔の人の知恵に触れてみるのもよい。住まいは過去からの延長なのである。

日本人が「静」から「動」に変わったとき、かまどが消えた

キッチンの高さを決定するもの

キッチンの調理台のサイズ（高さ）を決定するものは何か……というならば、それは体格といってもよいようで、INAXの「主婦と体格とキッチンに関する調査」（平成元年）では、①首都圏における主婦の平均身長は156.53㎝で、足の長さは88.64㎝　②年代別に平均身長と比較すると、40歳代は平均より1.13㎝低く、20歳代は1.87㎝高い。足の長さは40歳代では1.38㎝短く、20歳代は1.96㎝長い――、と報告し、身長および足の長さがキッチンに影響を与えていると指摘するのである。

調理台の高さは80㎝台が最も多いが、年々、主婦の身長、特に足が長くなるにつれ、85㎝のものや90㎝のものを欲する人が増えてきているし、昇降型で高さを調節するキッチンがもて囃（はや）されるのである。背の高い主婦にとって低い調理台は、使い勝手が悪いとともに腰痛、疲労の原因にもなるといわれるのである。

武蔵野の森が繁る川崎市立日本民家園（川崎市多摩区枡形7―1―1）には23棟の古民家が建つ。その古民家の広い土間に設置されたかまどを眺めれば、どれも腰が少し低い。

元福島県福島市に建てられていた旅籠の鈴木家住宅（19世紀前期）には馬屋の隣に大小二つのかまどがある。一つは馬用のもので幅約100㎝、もう一つは人用のもので約75㎝、人より馬の方が大きいのは、馬方の泊まる旅籠であるからだが、それだけ使用する湯の量も多かったからであろう。高さはどうかといえば、馬用が約80㎝、人用が約65㎝となる。

キッチンの高さをもっと調べてみようと、さらに古民家を歩き訪ねてみれば、三澤家住宅（長野県伊那市に建っていた商家。19世紀前半）のかまどは70㎝、江向家住宅（富山県東礪波郡に建っていた農家。17世紀末～18世紀初）の硝煙釜は30㎝であった。

古民家のかまど、その高さは30㎝のものあり、80㎝のものありとさまざまで、鈴木家住宅の馬用のかまどなど80㎝であるので現在と変わりないように思われるが、ところがそうではない。

鈴木家住宅のかまど

三澤家住宅のかまど

江向家住宅のかまど

北村家住宅のかまど

土や粘土で築かれたかまどの火床は土間に接しており、飯を煮炊きするために薪をくべるときには、しゃがみこまねばならないのである。現在のシステムキッチンは立位、だが、かまどは座位のスタイルとなる。

しゃがむ姿勢のかまど

日本人が忘れつつあるしぐさの一つが「しゃがむ」である。家庭において、トイレも洋式となることでしゃがむ姿勢がなくなった。キッチンもまた同じである。農家の土間にかまどが設置されていたころまでは、大人も子供もしゃがみこみ、まだ煮えぬかと待つのである。

ところで、システムキッチンの前に立つ姿勢とかまどの前でしゃがむ姿勢とではどう違うのであろうか。たとえてみれば、前者は「動」で、後者は「静」の姿勢である。かたやテキパキ調理し、忙しく働く主婦の姿が目に浮かぶのに対し、もう一方はぼんやりと時間をつぶしながら煮えるのを待つ主婦である。ゆとりという表現が的確かどうかはわからぬが、かまど前の主婦からは無駄な時間を楽しむ姿があったように思われる。

『しゃがむというのは、どうにも恰好のとれない姿勢であるらしい。トイレの中は別として、少なくとも公衆の面前でしゃがむのは不体裁この上もない姿勢とされている。いわば文明によって禁圧されている姿勢、それがしゃがむ姿勢である』

というのは多田道太郎氏（『しぐさの日本文化』角川文庫）であるが、いまの若者はともかく、文明化＝洋風化とともにしゃがむ姿勢は日本人から消え、そしてかまども消えていくのである。

和田宿のかまどは立位だった

だが、文明化＝立位と決め付けるわけにもいかない。江戸時代の絵図などみれば、武士の家の台所など火床は農家のそれよりも高くなっているのが見られる。中仙道和田宿の本陣（長野県小県郡和田村 2854—1）に立ち寄ったときのことである。文久元年（1861）に建てられたその本陣は皇女和宮降嫁の宿泊所となったところだが、そのかまどの火床は立位スタイルで行なえるもの。板台の上にしっくいで固めたかまどをのせているのである。

たくさんの料理をつくる家では、その忙しさから合理化を求め、立位スタイルにするのであろうか。キッチンの調理台の高さを決定するもの——、それは体格だけではない。人が忙しく立ち働き、心が「動」となるとき、しゃがむ姿勢から立位となり、キッチンは高くなっていくようである。

清宮家住宅のかまど

太田家住宅のかまど

和田宿の立位スタイルのかまど

和田宿本陣の台所

民家の３点セットは
かまど、流し、水甕（かめ）だった

水甕は屋内に
水を取り入れるための工夫だった

火と水が台所を成立させる条件とするならば、民家において一方の旗頭はかまどである。ではもう一方は……、と考えてふと思考が停止した。流し、いや、なんであろうか、それは水甕であった。この曲線をもつ艶やかな容器は民家に必要不可欠なものだった。

古代から人々は水を求めて彷徨（さまよ）い、清い水のあるところに定住した。川から水をいただく、山から流れる水を引いては水汲み場に貯めることを考えた。また深い地層から地下水を採水すべく井戸を掘った。

水は火に比べるとやっかいなものである。かまどはある程度、自由にその位置を定めることができる。囲炉裏などは座敷の中にまで持ち込むこともできるのである。

ところが、水はそう簡単にはいかない。水汲み場にしても屋外、へたをすれば遠くまで水を得に行かねばならない。簡単ではないが身近なところで利用したいのが人間の常である。そこで考えだした生活の工夫の一つ、それが水甕である。この水を貯めておく容器によって水は屋内でも利用できることができるのである。水甕は流しの横に設置され、かまど、流し、水甕が民家の３点セットとして成立することになる。

鈴木家住宅の流し台と水甕

国森家住宅の台所３点セット
（山口県柳井市の商家。明和５年（1768年）の大火後に建築）

北村家

北村家住宅の台所

漱石の千駄木の家にも
水甕があった

『畳数にしたら四畳敷もあろうか、その一畳を仕切って半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へっついは貧乏勝手に似合わぬ立派なもので赤の銅壺がぴかぴかして、後ろは羽目板の間を二尺遺して吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は膳椀皿小鉢を入れる戸棚となって狭き台所をいとど狭く仕切って、横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さになっている』

（夏目漱石『吾輩は猫である』から）

漱石が明治38年に『吾輩は猫である』の舞台とした千駄木の家の台所風景であるが、この台所には水甕も置かれていた。明治40年でも水道普及率は8.4%、まだまだひねれば蛇口から水の出るという時代ではなかったのである。

都会でそうであるから、農家においてはいわずもがなである。そんな水甕のある風景、民家を訪ねて出会えば心ゆさぶられる。

水甕のある漱石の家では、水源は庭に掘られた井戸である。そこから『吾輩は猫である』に登場してくる女中のおさんが水を桶に汲み運んでくるのであったのであろうが、重労働であった。

さらに、北国であるならば、外から水を運ぶのは厳しい。

そこで越中五箇山の上平村の合掌造りの家では懸樋（かけい）で屋内のウスナワと呼ぶ台所兼作業場に設置した水船に水を導いていた。あふれた水は排水溝で外へと流れる。その水場には光がこぼれ、合理性の中に美のある空間である。

鷗外が住んでいた小倉鍛冶町の家
明治 30 年頃に建てられた

鷗外の住んだ小倉の家は井戸があった

流しの横には水甕ではなく、井戸のあるのが森鷗外が小倉で住んだ借家。

『翌日も雨が降っている。鍛冶町に借家があるというのを見に行く。砂地であるのに、道普請に石炭屑を使うので、薄墨色の水が町に流れている。借家は町の南側になっている。生垣で囲んだ、相応な屋敷である。庭には石炭屑を敷かないので、綺麗な砂が降る丈の雨を皆吸ひ込んで、濡れたとも見えずにゐる。真中に大きな百日紅の木がある。垣の方に寄って夾竹桃が五六本たってゐる』（森鷗外『鶏』より）

鷗外が陸軍第 12 師団軍医部長として小倉に着いたのが明治 32 年 6 月 19 日。鍛冶町の家に借りたが、高級軍人用の借家として明治 30 年ごろに建てられたものである。

その鍛冶町の家を訪れ、土間に踏み入れ台所を覗けば、広い座敷のわりにはこぢんまりとしており、壁面に沿って、水甕に代わって井戸、かまど、流しと共に 3 点セットとして設置されていた。改造されたものらしく、新しくはあったが、明治時代の台所の姿を見せていた。

流しの横に井戸があるならば水を運ぶ労働から解放される。まさにひねればジャーの現代のキッチンに近い台所の姿があった。

台所

井戸

「豪農の館」の台所は広さが 70 坪 そのかまどはがっしりとしたレンガ製

7 代続いた新潟の 1000 町歩地主

新潟県に大きな大きな屋敷がある。豪農の館と呼ばれる伊藤文吉邸（新潟県中蒲原郡横越村大字沢海）である。

新潟駅からバスで約 40 分、阿賀野川沿いの上沢海という所にある。北方文化博物館として公開されているが、その敷地面積は 8,800 坪（29,200 ㎡）、そこに建坪で 1,200 坪（3,960 ㎡）、部屋数にして 65 もある木造純和風の屋敷が建つ。

土蔵門あり、三楽亭という正三角形の書斎兼茶室（明治 24 年頃に

建てられたもので柱、建具、畳にいたるまですべて三角）あり、廻遊式庭園ありと、その豪壮さはみごとであり、あきれるほど。

伊藤家について、ちょっと紹介すれば、初代文吉が越後、蒲原郷沢海村で一町二反歩余りの畑を譲られたのが宝暦６年（1756）のこと。吉宗の後の家重が将軍であった頃のことで、ここから伊藤家の豪農への道程がスタートする。その後、代々文吉を襲名するわけだが、質屋、金融業、運送業などを行って財を成す。

地主として発展するのは明治になってからで、

明治４年　　116 町歩余

明治８年　　122 町歩余

明治 23 年　747 町歩余

そして、明治 30 年代には 1,000 町歩の地主となる。

地主７代、1,000 町歩の新潟一の地主であるから、その屋敷もまた豪壮なのは当然といえば当然であったのかもしれない。

伊藤文吉邸の台所風景

毎日　米一俵を炊いた

1,200 坪の屋敷は明治 20 年頃の建立ということらしいが、一歩中に踏み入れば、大広間の廊下には長さ 30m（16 間半）の杉の丸桁があり、訪れる人々を「おぉっ」と驚かせ、感嘆させる。観光バスのガイド嬢もここが聞かせどころとばかりに熱がこもり、大広間から見る廻遊式庭園を堪能してもらうことになる。

台所もまた豪農の館ならではのものがある。その広さ 70 坪（231 ㎡）。「おれの家なんて、伊藤家の台所よりも狭いのか」なんていうことにもなるが、それにはそれなりの理由もある。

『豪農の館』（角田夏夫著・北方文化博物館発行）を読むと、こんなことが記されてある。『所有耕地が広範にわたってくると、三人くらいであった番頭は五人、六人となり、やがて七、八人となる。奥には家族直属の奥女中が五人くらいはいた。そして子供一人に乳母が一人ずつ、ついていたといわれる。中奥と称する部分にも五人くらいの女中がいたし、勝手にもやはり五人位が配置されていた。昔は食糧は自給自足であったため、畑二町歩くらいに野菜を作っており、作男の若い衆が三人くらいはいた。これらを統轄する女中頭がおり、台所番頭がいた。また、門には門番がいて夜番をしていた』

この他にも、大工、石屋、鍛冶屋、瓦屋などもおり、総勢 60 人位であったという。さらに、毎日のように来客もある。であるから、毎日、米１俵（60 kg）も炊くほどの広いスペースが必要であったわけである。

鍋、釜、水甕、酒甕、桶と並ぶ台所には小さな囲炉裏があって、その床は板の間である。何ヵ所か揚げ板となっているのは床下収納である。囲炉裏では座って暖をとるのであろうが、あとは立位となる。

かまどを見れば、煉瓦積みである。煉瓦積みのかまどは昔からあったということで明治期につくられたものだろうが、土間にどっしりと構えて据えられたそのかまどは、ガスを使用している。

ガス灯がともるのは明治５年のことであるが、調理用熱源としてガスが使われていくようになるのは明治も後半になってからのことで、明治30年代には瓦斯会社の広告も登場している。

例えば明治36年には「東京日日新聞」に東京瓦斯会社が『瓦斯は燈火用の外　料理其他一般の煮焼用として　使用は軽便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ　火力加減自在にして　火災の危険なく　且大に人手を省き　費用は薪炭よりも低廉なり』と広告をだすわけだが、そうすると、伊藤家のかまどは明治も30年代以降のものとなるか、それとも大正に入って改良したものか。ともあれ、どっしりとしたそのかまど、豪農の館ならではの大きなものであった。

豪農の館に豪華な台所あり。大広間で庭を眺めるのもよいが、囲炉裏の側でゆっくり台所を眺めるのもまたよい。

「坐り流し」に日本の「座」の歴史があった

山梨県下部町の門西家

門西家

山梨県下部町。温泉の町である。その湯の町の湯之奥集落に江戸中期に建てられた民家がある。門西家という。民家は石畳を登りつめた山の上。赤い鳥居のある湯之奥神社の手前に建つ。

この神社は金山（きんざん）の守り神である。湯之奥山は金山が眠っていたところであり、その昔、武田信玄の隠し金山といわれていたところである。信玄の時代、最盛期には中山金山、内山金山と37ヵ所もの金山が発掘されていたということだが、それに合わせて精練所、官屋敷、寺屋敷、女郎屋敷などが建ち並び、湯之奥千軒とも三千軒ともいわれた。

そうした集落の入り口には門が建っており、門の西に屋敷を構え、金山を管理していたのが門西家なのである。

天文年間（1532～1555）に門西家はこの地に居を構えていたらしいが、武田の滅亡後も湯之奥金山や山林などを管理し、関守や名主を幕末までつとめた。

門西家は茅葺きの入母屋造り、桁行７間半、梁間６間で、平入りである。大戸口から中に入れば、その間取りは広間型。土間、広間、座敷と並列した３部構成となる。

広間は板敷きで、土間と合わせて天井がない。太い梁が組み合わさって露出する。その梁は虹梁と呼び、自然に曲がった材を使っている。その曲がり様が虹のように見えるのである。

広間は台所とあがり場とに分かれており、台所には囲炉裏がある。そして、土間には二口のかまどが置かれてある。みればまだ暖かく、いまでもこの家ではかまどを使用しているのである。重要文化財に

指定（昭和 39 年）されている中で、生活するのは苦労も多いことだろうが、その生活の匂いが江戸期へとむかわせてくれる。

坐り流しに無双窓

かまどの隣に流しがある。家の隅にあたるが、その流しは坐り流しであった。流しの前は明かり採りとし、陽が差し込んでいる。

坐り流し――昔は一体どんな格好をして作業していたのだろうかと気になった。一般に坐り流しといえば「跪（ひざまず）く」格好で行うといわれる。しかし、この門西家の坐り流しは腰が低く、跪く格好ではやりにくい。坐って行っているのではないかと思われる。

坐るという姿勢は中国は唐の時代に日本に伝わったようだ。そのときの姿勢は「跪く」もの。柳田國男によると、拝跪（はいき）の礼から坐る姿勢が始まったようだ。

『その跪座（きざ）から「坐る」ということが来ている。したがって、昔は腰を足の裏に落ち着けてはいけなかった。ところが、家庭内にしばしば客を迎えるようになって、この跪座がくずれ、人びとは「坐る」ようになる。』（多田道太郎著『しぐさの日本文化』から）

跪く格好から正座へとなるようだが、坐り流しでは正座とはいかぬまでも跪いたり坐ったりして作業したのではないだろうか。そんなことを門西家の坐り流しを見ていて思うのである。

流しの歴史では坐り流しから立ち流しとなるが、そうであるから坐り流しのある民家は建てられた年代も古いということがいえる。立ち流しが一般に伝わるのは江戸時代後期以降ということだが、明治になっても坐り流しは使われ、ようやく大正時代に入って立ち流しは普及することになる。

山田家住宅の台所
（富山県東礪波郡に建っていた農家。17 世紀後半）

日本民家園の坐り流したち

神奈川県川崎市の日本民家園でも坐り流しをいろいろと見ることができる。

伊藤家住宅（旧所在地・神奈川県川崎市）は 17 世紀末から 18 世紀初に建てられた名主の家。

こちらも広間型の民家で、土間、広間、座敷と分かれている。土間は物置のミソベヤとかまどのある台所とに分かれており、流しはというと、広間と土間との境に板の間を張り出して壁際に置かれている。山梨の門西家は土間に坐り流しがあったが、こちらは広間にあり、流しが家の中に入りこんだ形となっている。

小さな水甕がひとつ、無双窓から外を眺めることもできる。この民家の坐り流しは無双窓とぴったりとあっており風情がある。

北村家住宅（旧所在地・神奈川県秦野市）は貞享 4 年（1687 年）に建築というから古い。その坐り流しはというと、広間に上がって勝手部分としてしっかりと座を占めている。流しのあるところは板間で、広間の 3 分の 1 を占める格好。あとの 3 分の 2 は囲炉裏のある竹簀子（たけすのこ）敷きである。

大きな水甕がある。しかし、その水甕は土間部分に置かれてある

伊藤家住宅（旧所在地・神奈川県川崎市）
17 世紀末から 18 世紀初に建てられた名主の家。

北村家住宅（旧所在地・神奈川県秦野市）
貞享 4 年（1687 年）の建築。

ので、坐って作業していてもちょうどいい高さだ。木桶なども並び、昔ながらの生活をここでは見ることができる。こちらも無双窓が坐り流しの前に広がる。

菅原家住宅（旧所在地・山形県東田川郡朝日村）は18世紀末に建てられた農家。こちらの坐り流しは広間に接続してはいるが、土間に突き出して板敷きしたもので、まだ上には上がらせないぞというように見えるスタイルである。しかし、その突き出したスタイルが独立した空間として趣あるものにしている。約1間四方の板間の中央に流しが置かれ、木桶を配置する。流しが壁際にあるのは水を家の中に引くための処置である。

このほかにも坐り流しがみられるが、変わったところでは、江向家住宅（旧所在地・富山県東礪波郡上平村）のもの。17世紀末から18世紀初めというその民家の坐り流しは石の水舟を使ったものであった。水舟は懸樋（かけい）で引いた水を貯めておくもの。それを洗い場としていた。現代に見られる立ち流しではなく、坐り流しは、低い位置にどっしりと腰を据える。そうであるから落ち着きある空間を醸し出しているようだ。

江向家住宅（旧所在地・富山県東礪波郡上平村）は、17世紀末から18世紀初めに建てられた民家。その坐り流しは石の水舟を使ったものであった。

菅原家住宅

山口県柳井市の「むろやの園」には江戸時代の風情を伝える据え風呂があった

柳井は白壁の商家の家並みが続く

山口県の南東部に柳井という町がある。瀬戸内海に面した港町である。室町時代からの町割が残っており、古市、金屋地区の街路には妻入形式で白壁の商家の家並みが続いている。

この町を舞台にして作家の故・松本清張は小説を書いたことがある。

『珍しい町の風景だ。近年、こういう古めかしい場所がだんだん少なくなっている。世に有名なのは、伊豆の下田と備中の倉敷だが、ここにもそれに負けないような土蔵造りの家が並んでいる。』

『花実のない森』の一節である。清張が表現するように、約200mほどと短くはあるが、柳井は江戸時代から明治の町を散策するような気になる町なのである。

瀬戸内に流れる柳井川沿いに白壁の家は並んでいるが、この柳井川から柳井の商人は全国各地へと商品を運んでいったのである。

柳井の町で一、二を競う大油商人であったのが小田家である。屋号を「室屋」といい、開業は元禄元年（1688年）という。小田善四郎という人がこの柳井で開業した当時は、すげ笠、打ち綿、反物を扱っていたらしい。

その後、油商人となり、商圏は西に九州、五島列島、東に大阪ま

むろやの園

で手を広げて商取引したようだ。最盛期の天明年間（1780 年代）には帆船 50 艘ももっていたという。

中間部屋に小さな台所

中間部屋の台所

その小田家の享保末期（1730 年頃）に建てられたという、主屋をはじめ本蔵、勘定蔵、米蔵、馬屋、道具小屋、中間部屋など 11 棟が「むろやの園」として山口県有形民俗文化財に指定されて残っている。細長い屋敷構えである。屋敷面積は 2,400 ㎡もあり、南北に 119m 伸びている。

主屋は部屋数が 18 室もある。通りに面して店があり、そこには蔀帳（しとみ）と呼ばれる板戸が鴨居から下げられており、観光客の目を引く。いわば現代のシャッターなのであるが、3 枚構成になっていて、上の一枚を釣り上げ、下の 2 枚を取り外せば店開きとなる。

帳場のある店の裏には中庭があるが、その中庭を油つぼを形どった窓から眺めるという風流なつくりである。

台所が通り庭にある。2 口のかまどには羽釜と弦鍋（つるなべ）が置かれてある。その横には神棚があり、大小の甕やつぼが横にある。流しは横幅のあるコンクリート製で水道が引かれていた。

天保 6 年の古図が小田家にあるが、そのころの台所の位置は現在とは少し違い、座敷に近いところにあった。現在の台所は増築して台所を広くしたようである。

本蔵の前に中間部屋があり、3 畳よりも少し広い部屋が 2 つある。その部屋を覗いてみれば、傍らに小さな台所が設置されていた。弦鍋が置かれてある 1 口のかまどであり、収納もあった。

江戸時代に普及した据え風呂

主屋の風呂

風呂は主屋から渡り廊下でつなぐ。畳 2 枚が敷かれた脱衣所の隣に風呂場があり、こちらも 1 坪ほどとなる。そこには木桶の据え風呂が置かれてあった。

据え風呂は太閤秀吉の朝鮮出兵から始まったという（『風呂のはなし』大場修著　鹿島出版会）。戦場で入浴するために考案されたようだ。たしかに据え風呂は持運びに便利なもので、江戸時代には各家庭に貸し出すレンタル業も流行っていたという。

「つれづれに据風呂焚くや五月雨」

天明時代の俳人・太祇の句であるが、江戸時代では一般家庭で普及していたようだ。

主屋の台所

小田家の風呂場は古図と同じ位置であるが、古図にはいま一つ中間部屋の隣にあったようである。逆に古図にはないが現在あるのが家族風呂。半閑舎という離れにある。

6 畳 2 間、3 畳 2 間、そして居間に茶室のあるこの離れにある風呂は五右衛門風呂であった。

五右衛門風呂は石川五右衛門の釜煮の刑を由来とするが、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の中で弥次さん喜多さんが旅籠で入った風呂としてよく知られている。

「東海道中膝栗毛」から五右衛門風呂のある光景を覗いてみれば、一つは関西で流行っていたものであり、土でかまどを築き、その上に薄い鉄板を敷いて、さらに鉄板の上に底を抜いた風呂桶を置き、周囲を水が漏らないように漆喰で塗り固めたものだった。

湯に入るときは底板を沈めて入るわけだが、関東者の弥次さん喜多さんはそれを知らない。底板をとって入ったものだから「アチチチ」となる話である。

小田家の五右衛門風呂は新しいもののようで、弥次喜多の入った木桶の風呂ではなく、回りをレンガを積みコンクリートで固めたものだった。

広い屋敷内を歩くと井戸が２つあった。昔は炊事用の井戸、風呂用の井戸、作業用の井戸、長屋の人々のための井戸ともっとあったようだ。そうした井戸の配置も心にくいものがある。

町屋つくりの商家としては日本一の「むろやの園」、台所から風呂まで見所がいっぱいである。

北海道の開拓時代の台所と浴室は伝統的和風様式をひきずっていた

作家有島武郎が住んだ家の台所

札幌市東方の小高い丘陵地帯に野幌森林公園がある。昭和43年に北海道100年を記念して指定された北海道立自然公園である。この公園の中に明治・大正期に建てられた北海道の建造物を復元・再現した「北海道開拓の村」がある。村内は市街地、農村、漁村、山村と４群に分かれており、約54ヘクタールの敷地内に60棟ほど建ち並ぶ。開拓時代の北海道にタイム・スリップさせてくれるが、夏には馬車鉄道、冬には馬そりが走り楽しませてくれる。

開拓時代の「キッチン＆バス」、いや「台所と浴室」はどんなものであったのかと村を散策すれば、まず目に飛び込んできたのが作家の有島武郎が明治43年から１年間住んだという「旧有島住宅」。武郎はここで『或る女のグリンプス』を執筆したが、明治37年に建てられた一部２階建ての木造平屋（28.75坪）であった。

明治30年代末というと、一般庶民の住宅にも洋風様式が普及しだした頃。有島住宅でも柾葺きで急勾配の屋根、西洋下見板張りの外壁、上げ下げ窓、洋風出窓などが採用されている。しかし、外観は洋風を取り入れているものの、内部はまだ伝統的な和風様式である。

台所は勝手口、押入を含めて7.5畳大。板敷きで木製流しがポツンと置かれてあるがその前は出窓となっている。茶の間、書斎、廊下の突き当たりにあった便所を覗くが、風呂場はない。移転にともない改造したかと思ったが間取り図を見てもそれらしき痕跡はなし。

別棟に建てていたのであろうか。

板敷き・造り付け風呂の松橋家

有島住宅の隣に「旧松橋家住宅」がある。北海道炭鉱鉄道会社で札幌駅助役などを勤めた人らしいが、その家は 80.94 坪（267.1 ㎡）と大きく、明治 30 年頃に建てられた木造平屋一部２階建てである。有島住宅と同じように下見板張りの外観であるが、内部は一部屋洋間があるだけで、あとは座敷である。北海道の家といっても採暖方法はヒバチが置かれてあるのみで江戸期そのままの様式であった。女中部屋の隣に台所がある。かまど、流し、水甕が並ぶ約 10 畳ほどの台所である。

こちらには離れの座敷近くに約３畳ほどの浴室があった。江戸時代の武家屋敷や豪農の住宅では浴室（湯殿）を板敷きとし、水勾配をつけて中央の溝から外に流す造作が見られるが、旧松橋家住宅もこうした伝統的手法の浴室であった。ただし、その浴室に桶を運んで湯を取るというものではなく、外釜式の造り付け風呂であった。「旧福士家住宅」にも浴室があった。村を回っても浴室のある住宅というのは数少なく希少価値のある建物のひとつである。

明治前期の洋館と明治後期の和風住宅を接続した和洋２館型というのがこの「旧福士家住宅」（77.83 坪）の特徴。洋館は札幌病院診察室であったようだが、下見板張りで上げ下げ窓のある平屋建て。和風住宅は座敷のある伝統的なつくりである。居間は広く中央に囲炉裏形式でストーブが置かれてある。後に囲炉裏を改良したのだろうか。居間と４畳ほどの台所は障子で仕切られて接続されている。台所には流し、水甕、かまどが一列に並んでいた。台所の隣に浴室はあり、板敷きに据え風呂が置かれていた。

もう１棟浴室のあった「旧ソーケシュオマベツ駅逓所」は明治 40 年に建てられた官設駅逓所で、物資輸送の継立や宿泊施設を必要とする場所に設置されもの。牧場もあり８頭の官馬も所有していたという。そのため、付属施設として厩舎もある。

木造平屋建て（72.43 坪）で内部は客室３室、取扱人室、使用人室とに分かれており、いわばステーションホテルといった感じである。そうであるから浴室も装備しているのであろうが、脱衣所を含めて約３畳ほどで、土間に据え風呂が置かれていた。

台所の中央には大きな囲炉裏が設置されている。この台所は談話室でもあり、勝手口から草鞋のまま入り、囲炉裏を囲んで談笑できるようになっている。流しが勝手口側にあるが、小さいものであった。ただ、開口部が前面と左右にあるので明るく、動線も短いので作業はしやすいように思えた。

コーナー出窓のある農家の台所も

明治 15 年に建てられた「旧岩間家農家住宅」の台所は立派なもの。43 坪（141.9 ㎡）の面積のうち半分を台所、茶の間で占めており、中央に囲炉裏を置く。床も壁もすべて板張りで、かまどや流し、

旧岩間家農家住宅の台所

旧福士家住宅

旧福士家住宅の居間と台所

旧福士家の据え風呂

旧ソーケシュオマベツ駅逓所

水甕などみんな大きく、前面は出窓形式になっており、上部は収納棚。明治時代の豪華なシステムキッチンといったところだ。動線も悪くなくコーナーをうまく活用したその造作に感心する。

他にも明治・大正期の台所を覗くことができるが、最後にもうひとつ、商家の台所を紹介してみよう。大正２年に建てられた「旧近藤染舗」（54.85 坪）という店舗兼住宅は職業柄か和風の建物。店舗の奥に座敷と台所がある。大正期に入ってもさほど建物に変化はなく、採暖方法も火鉢だし、台所も近代化はされてはいない。しかし、流しはトタン張りになり、井戸のポンプで水を採っている。職人たちは台所で食事をとっていたようで、長いテーブルが置かれてある。現代の DK 形式に近いスタイルである。

北海道の明治・大正時代の台所と浴室は江戸時代のなごりを引きずりつつ出身地の様式を採用しながら変化していた。そうした様子を「北海道開拓の村」は教えてくれる。

武井商店

旧近藤染舗

旧近藤染舗の台所

武家と農家の収納を比べてみれば 機能重視型とスッキリ型

立派な収納棚のある武家屋敷

台所というのは平安時代の頃の「台盤所（だいばんどころ）」からきているといわれる。台盤、つまり配膳する台のある空間で、台所は台所用具の整理室であったのだ。

武家の家、それも上級武家ともなると、いろいろと台所用品もあり収納場所は大きい。「女諸礼集」の絵図をみると、竈が７つ、その正面に２間ほどで３段の収納棚がある。手桶、俎板、包丁、酒器などが整理して置かれてある。流しは立ち流しで、その前に横木を通して杓子が吊されてある。こうした上級武家ともなると台所用品はきちんと整理されており、しかも機能的な感じだ。

中級武家でも流しの横に２段、３段とある棚を設け、野菜などを置いてある図が見られるが、大方、武家では立派な収納をつくっていたようだ。

明治時代に入っても大隈重信邸のような上流階級になると、これまたすごい。一間半ほどの戸棚あり、棚あり、鍋は壁に吊され、包丁もすぐに取りだせるように機能的に掛けられている。

白亜の天守「姫路城」に登城すると、廊下の長押の上には横木を通し、そこに 15 ㎝間隔で竹釘を打ち付け火縄を掛けるようにしたり、長押の下は木製の武具掛け、鉄砲など並べており、いつでも武器を取り出せるようにしてある。武家や明治の上流階級の台所もそんな城と同じように機能的なのである。台所用品というのは武家にとって武器と同じだったのかもしれない。

棚一枚の山形の民家

ところが農家ともなると、台所の収納は貧弱である。

山形県新庄市に重要文化財に指定されている旧矢作家住宅というのがある。18 世紀中頃に建てられたものと推定される中門（ちゅうもん）造りの農家である。中門造りは新潟、福島、山形、秋田地方に見られる民家形式で、曲がり家造りと同じＬ字型をしている。ただし曲がり家造りがその突き出た部分が厩（うまや）なのに対して、中門造りは母屋への通路、厩、便所などで構成されている。矢作家は梁間３間、桁行７間の中農住宅であるが、間取りは広間型３間取りである。

庭には厩が２つあり、北側に少し突き出した形で流しとその隣に風呂桶も設置されている。その旧矢作家の収納場所、右の壁に棚が１段あるだけなのだ。鍋なら３つ４つ置けばそれでいっぱいである。

民家における台所道具の整理術について、大正年間に民家調査を行なった今和次郎は、『勝手間あるいは台所そのものに炊事場が出来ている場合もあるが、その個所寄りの土間に炊事場を作っている家もある。土間の裏手の壁には無双窓を作り、その下にナガシを置き、水甕を置いて、棚をその近くに作るというのが一般である。また台所の壁側に２段になっている戸棚を設けて、食事用のものを入れるようにしているところも多い』（『日本の民家』）と書いている。

流しの近くに棚があるのは一般的だとしても小さな棚が１段というのは、昔の人は道具も少なくこんなもので済ませていたのだろうか。

エドワード・S・モースは明治時代に『日本の住居をみて、室内にものがない、ということにおどろかされた。アメリカ人はたくさんのものをもち、そのために収納場所がいつもごったがえしていたり、屋根裏ベヤではリスが巣をつくっていたりする。

しかし、日本では、こうしたことがまったくない。これは、ごくふつうの家についてのことである。このような現象がみられるのも、日本には、いつか役にたつだろうというようなケチな精神はなく、ガラクタやクズなどを、いたずらにとっておくことがないからだ。

アメリカ人でも、極端な人になれば、屋根裏ベヤや物置小屋を、廃品回収屋のようにしてしまう人がいるが、これにたいして、日本人は、ごくわずかの必要品だけを、箱や戸棚、床下などにしまっている』（『日本のすまい / 内と外』）といい、すっきりとした空間に驚いているが、台所もまたすっきりとしていたのだろうか。ただそれは一般の家、とくに農家などでは物がそんなに多くなかったからではなかろうか。

旧矢作家

旧矢作家の流しと風呂

出窓型収納もあった

それでもいろいろな工夫をしているのが民家。南部曲がり家の一つ、岩手県東和町にある「小原家」では坐り流しの前を無双窓とし、その上部を３段に仕切って棚としてある。洗い物などをそこに置いたりしたのだろう。さらにその収納部、スペースの活用で外に

南部曲がり家の小原家

出っ張っている。いわば出窓型収納なのである。囲炉裏にも収納の工夫があった。囲炉裏は足置き板のある腰掛け式で、そこが物入れになっている。

武家に比べて台所用品は家族だけのもので少ないだろうとはいえ、居住スペースも小さくなるので収納の工夫が必要であったようだ。

水甕、その水甕に水を運び入れるための「手桶」や「小桶」、大量の水を汲み上げる時は「さるぼう」、小量の時は「柄杓（ひしゃく）」、さらに水を濾過する「水漉し」、「包丁」「ざる」「ふきん」「束子（たわし）」、食器類もいろいろとある。そんな道具をいかに整理するか、昔から知恵を絞っていたようだ。モースが紹介した杓文字（しゃもじ）などを入れる竹筒などかわいい知恵だった。

小原家の台所と囲炉裏

川崎民家園にある三澤家の台所と戸棚